



大方あかつき館報

第33号
2020年9月発行

あかつき

第35回 上林院文学館企画展
娘に送る手紙

と き:2020年8月7日(金)~10月31日(土)
と ころ:大方あかつき館2F 上林院文学館
休 日:本館日・祝祭日・館内整理日(8/28・9/25・10/30)



主催:上林院文学館/〒789-1931 高知県幡多郡黒潮町入野6931-3 大方あかつき館内
☎ 0880-43-2110/fax0880-43-0222/E-mail:fakatsuki25@w.kane.jp

(会期) 2020.8.7 ~ 2020.10.31

第35回 上林院文学館企画展

『娘に送る手紙』

日本人だけで約310万人の犠牲者を出した「太平洋戦争」が
終わり、今年で75年になります。世代が移り変わっても、この戦
争のことは決して忘れてはならないことです。今回の企画展では、
「上林院は、戦禍の時代をどのように観てきたか」に焦点をあてま
した。開戦時に書かれた「歴史の日」では楽観さえ感じますが、
身内による神風特別攻撃が実行され、本土決戦がささやかれる昭
和20年6月から書き始めた「娘に送る手紙」では、入野の浜に米
兵が上陸するかもしれないと怯えます。また、上林を慕って上京
した郷里の後輩たちが、次々と戦死してゆく作品「年少の友」に
書かれた無念は、絶筆の「秀夫君」まで引きずられ、自分の死が
近いことを悟った上林が、最後に書きたかったのは、自分の何分
の一かの若さで死んでいった、彼らの「人生」だったのでしょうか。

「歴史の日」

昭和十六年十二月八日は、遂に歴史の日となりました。
(中略)

隣のラチオが突然臨時ニュースの放送をはじめたのである。

「大本營陸海軍部發表、十二月八日午前六時、帝國陸海軍は
本八日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり。」

私は方へと起きて、臺所で朝の仕度をしてゐる妹に向つて叫んだ。
「いよいよアメリカ・イギリスと戦争がはじまつたよ。」(中略)

「今日はこれから重大な放送があるかもしれないから、そのま
まスイッチを切らずにおいで下さい。」とテナウン・サアが繰り返しかへし
言つてゐる。火はどんな放送があるのだろうか、その邊淵が一種の
重苦しい緊張を漂はした。
軍艦マチの奏樂が湧き起つてゐる。

私はそばに寄つて来た、五つになる女の子を抱き上げると、平生ぐつと
仕方のない子だから、一ひの際活を入れておかうと思つた。

「アメリカと戦争がはじまつたんだから、もうぐつぐつ言っちゃ、駄目だよ。
好い子で居さすりや勝つんだから。」(中略)

「情報局發表、八日午前十一時四十五分、只今アメリカ、英國に對する宣
戰の大詔が發せられ、また同時に臨時議會召集の詔書が公布されました。」
宣戰の大詔は、遂に發せられた。容を正して、私は拜承した。つづいて、
内閣總理大臣の放送が行はれた。これは最も歴史的な瞬間であつた。

(中略)

「マニラ、シンガポール、香港、グアム、ハワイ、敵の空軍基地は全部爆撃さ
れたぢやないですか。これでは敵は手も足も出ないでせう。」と八濱さんが安
心した聲で言つた。

露地の突き當りの電柱の肩に、ひしやけた黄機色い月が靜かに昇つてゐる。
(中略)

風呂から出ると、月は大分昇つて、霧に溶けた柔らかな月の光の中を歩いて
来る人の影が長く、映畫の一場面のやうな感じだつた。

「風呂の雰囲気も、いつもちがつた感じですね。」と私が言つた。
「みんな、なんにも云はないけれど、戦争のことが腹の中にあるものだから、
いつもちがひますね。」

私達は、そんな話をしながら、踏切のところで來てゐるおでかで、そぞ別れた。
「二日一日が大切ですからお互に腰を据ゑませう。」

さう言つて、私は歸つて來た。途々、白壁の家に、月の光がくつきりと射
してゐるのも、歴史的な夜だけに、心に沁みだ。

私は十二時過ぎまでかかつて、やつと原稿を書き上げた。
米英に對する宣戰の第一夜は、靜かに更けて行つた。
(昭和十六年十二月)

「散花」1



「俺ア、それを聞いても、まさかと思うて、眞實にすることが出来らつた。」と言つて、貞叔父は笑つた。自分の子供が神風特別攻撃隊などといふおほけない攻撃隊に加つて、殉國の花と散り、その勲がラヂオを通じて全國民に布告されるといふことが、まるで夢のやうで、俄に眞實と信じられなかつたのであつた。「散花」(昭和20年1月20日)

写真(出撃前)左端が野並 哲さん(上林暁の従弟) 写真提供:梅森 真寿さん(野並哲さんの姪)

「散花」2 (昭和二十年一月)

僕の父は、毎晩七時の報道を聴くのを、一日の最も大きな楽しみとしてゐる。一日の仕事を終へ、夕食をすませると、七時になるのを待ち兼ねて、寢床へ入る。ラヂオは枕元に、手を伸ばせばスイッチの捻れるところに据ゑてあつて、寢ながら聴くのである。(中略)

十一月半ば頃の或る晩、父はやはりさうしてラヂオを聴いてゐた。その晩父の耳朵を打つたのは、神風特別攻撃隊三千七勇士の布告であつた。(中略)

するうち、父が突然鋭い叫び聲を擧げた。

「ありや、特別攻撃隊に野並哲といふ名前が出たけんねえ。」

僕はその時奥の間で本を讀んでゐたが、父の聲を聞くと、一瞬からだかジャンと痺れて、なんとも言へぬ感動を覺えた。野並哲は、母の弟の貞叔父の長男だから、つまり母には甥、僕には従弟に當るのである。

「哲に間違ひないぢやろか。」隣の部屋で、やはりもう寢床に就いてゐた母が聞き返した。

「間違ひないと思ふね。確か初櫻隊ぢやつた。一等飛行兵曹野並哲と言つたぞ。」

「哲は一等飛行兵曹ぢやから。」と妹の八千代が言つた。

※写真は野並 哲さん 提供:梅森 真寿さん(野並哲さんの姪)



「散花」 3

(昭和二十年一月)

翌る日の朝方、母が納屋口で稲を扱いてみると、母に聲をかけながら入って来たのは、貞叔父であった。

貞叔父の顔を見ると僕は心の昂ぶりを感じながら言った。

「哲がやつたらしいね。」

「やつたらしい。」と貞叔父は静に答へた。叔父甥とは言ひながら、歳は一つしか違はないので、僕達の間に隔てがなかった。

「昨夜のラチオは間違ひないぢやろねや。」稲を置いて、母が出て来て言った。

「みんなが哲の名前を聞いたと言ふけん、もう間違ひないねえ。」と貞叔父は断定するやうに言った。

昨夜、貞叔父は何も知らないで家に居た。そこへ、隣の本家から呼びに来たので行つて見ると、今ラチオで神風特別攻撃隊の布告が出て、哲の名前も放送されたといふことであつた。本家の人たちは、布告が始まると同時に、なんだか哲の名前が出さうな予感

がして、今に出るか今に出るかと思ひながら、ラチオの周りに詰め寄つて聞いてみると、豫感ほ的中して、初櫻隊海軍一等兵曹野並哲といふ名前が出たので、「そりや見よ」と顔を見合せたのであつた。

「俺ア、それを聞いても、まさかと思つて、眞實にすることが出来らつた。」と言つて、貞叔父は笑つた。自分の子供が神風特別攻撃隊などといふおほけない攻撃隊に加つて、殉國の花と散り、その勲がラチオを通じて全國民に布告されるといふことが、まるで夢のやうで、俄に眞實と信じられなかつたのであつた。



※写真は野並 哲さんの父貞男さん。上林の母の弟にあたる。提供：梅森 貞寿さん（哲さんの姪で貞男さんの孫）

「散花」 4

(昭和二十年一月)

「入野の宮川の子もやつたらしい。」と貞叔父は言葉を革めて言った。

「宮川？」

「宮川春次さんとの子。」

「あら宮川正さんなら、わたしが入野の學校で教へた子よ。」妹の八千代が飛びつくやうに言った。妹はもと、その隣部落の小學校で教師をしてゐたのである。そして、宮川の母親はまた、僕の従

姉になるのであつた。「中學校も豫科練も、哲と一緒やつた。哲は二十ちやつたが、宮川の子は十九ちやつた。」

「みんな若いこと」と妹が言った。(中略)

新聞を見ると、神鷲と讃へられる三十七勇士達の中に、野並哲の名も紛ふ方なく載つてゐた。その名は後光が差すごとく、僕の眼を射た。何れ劣らぬ勇士達に伍して、彼の名だけが彫上げの如く盛上つて見えたのも、身内のせみであらう。殉國一途の心事を思ふと、いちらしくて、眼頭が熱くなつて来た。宮川正の名も菊水隊に譽れを放つてゐた。哲達の隊の戦果がまだ確認されてゐなかつたのは淋しかつたが、宮川の隊の戦果は確認されてゐた。彼等の隊が敵艦を轟沈した十月二十五日といふ日は、彼の部落の郷社賀茂神社の例祭りに當つてゐることも、奇しきことに思はれた。



※写真は宮川 正さん 提供：宮川速雄さん（正さんの甥）

「散花」10

「散花」に登場する野並 哲さんは上林の従弟ですが、宮川 正さんのお母さんもまた、上林暁の従姉です。従つて、「散花」には二人の特攻隊員への特別な感情が籠められています。作品が書かれたのは昭和二十年一月、上林暁は、ふるさとから帰京した後、宮川正さんの父・春次郎さんあてに、次のような手紙を書いています。

「二人の特攻隊員」(大西 正祐氏 著 より)

謹啓、寒さ厳しくなりましたが、其の後は皆様お変わりなくお過ごしのことと存じます。帰郷中は久しぶりにお目にかかり、又神風特攻隊の布告にも再会致し、千載一遇の好機と存じました。(中略)度々空襲がありますが、幸い元気でいます、新聞で承りますれば正君も少尉に特進されました趣、榮譽の上なく存じます。目下、新宿伊勢丹の三階にて、神風隊の展覧会が催され、昨日見て参りました。正君、哲など半身の大写真が額にして掲げられていましたほか、それぞれ遺品、遺影が飾られていました。正君のは、飛行学校で書いた宣誓書のような書きもの、ご一家の写真、松戸、野並、矢野川三君と共に撮った写真、中学の制服を着て松戸、野並など撮った写真などありました。それぞれ説明が書かれ、家族の氏名、年齢なども書かれ、感慨無量でした。

※中学三年卒との最後の別れ(昭和十七年)写真提供：梅森良寿さん
前列右から宮川正さん、野並哲さん、松戸伊佐雄さん



宮川家家族写真(写真提供：宮川速雄さん)



「散花」12 お別れの上空旋回・・・

大西正祐氏著の「二人の特攻隊員」では、近所の秋沢香代子さん(黒潮町在住)が、高知新聞「声ひるぼ」(二〇〇六年八月二十六日付朝刊)に綴った思い出が引用されています。

《今思うと切ないお別れの上空旋回》

旧制中学生だった正ちゃんにはよく遊んでもらった。夏休みには宿題を教えてもらい、夕方になれば近所の女の子たちを集めて女相撲をさせたり、背戸の辺りを一周走らせ、てはタイムを計ってくれたりした。子ども心にも男前だと思った。

その正ちゃんが特攻隊員として学徒出陣して行った。ある日「今日は正ちゃんが家の上空に飛んで来るので、みんなで見送る」、母はそれだけ言って私を正ちゃんの家の中に連れて行った。間もなく飛行機が来た。大きく手を振りながら「正ちゃん、正ちゃん」と叫んだ。機はゆつくりと二、三回旋回して遠ざかった。「海行かば」は広辞苑によると元海軍儀式歌で、万葉集にある大伴家持の長歌「海行かば水漬く屍・・・」に由来するところがあるが、この歌のごとく、正ちゃんは間もなく菊水隊の隊員として華々しく海に散った。

まさか、あの上空旋回が最後の別れだったとは小学校低学年の私には知る由もなかった。

今になって、正ちゃんはどんな思いでわが家の上空を飛んだのか、見送る家族の心中は・・・と考えると、やり場のない気持ちになる(後略)

正さんは、最後に帰った時も、特攻隊のことは一言も喋らなかつたそうだ。ただ、家族は、父春次郎の兄で、日本経済界の重鎮であった宮川竹馬氏を通じて全てを知っていたという。双方が特攻のことには一言も触れない中、兄の晋さんは、正さんの肩をトントンと軽く叩いてあげた。(宮川速雄さんの話)

「ツルばあちゃんと正さん」写真提供：宮川 速雄さん





「娘に送る手紙」1

上 遺 書 六月十三日昭和二十年

今日からお前に宛てた手紙を書きことにする。

(中略)

「ここ當分、僕は田ノ口へ歸れさうにない。益々歸れなくなる一方であらう。若しかしたら、もう一生お前達に會へないかも知れないと思ふ。これは決して僕の心配性からではない。今日にでも空襲を受けて、爆弾を喰はないとは限らない。

さうでなくとも、本土が決戦場に化すれば、帝都を死守して殞れなくてはならないかも知れないのだ。しかし、この危険は、僕だけのことではない。お前達の運命だつて、いづつどうなるか判つたものではない。

沖繩本土の決戦も我に利あらず、國民の全部が、今や米軍の次期作戦を固唾を嚥んで凝視してゐるところだ。米軍は恐らく本土侵寇を企てるであらう。その時米軍が何處に上陸地點を求めめるか、九州と言ひ四國といふ中にも、四國だといふ聲の方が高い。僕もなんだかそんな氣がしてならぬ。

四國と言へば、我が高知縣だし、高知縣のうちでも、西南端に當る幡多郡のやうな氣がする。幡多郡のうちでも、白砂青松の遠淺で、敵前上陸に持つて来いの入野の濱が考へられる。

入野の濱に米兵が上陸して来れば、お爺さんもお婆さんも、お前も幸夫も三津子も、叔母ちゃん達の運命はどうなることであらう。みんな艦砲射撃にやられるか、斬込挺身隊となつて玉砕するのではないか。家や屋敷や田畑もなくなつてしまふだらう。入野の濱に米兵が上陸して來る時のことを考へると、息が詰りさうだ。

親も子も兄弟も、家も屋敷も財産もなくなつて、たつた一人東京に取殘されないと限らない。戦争が濟んで、浦島のやうになつて故郷に歸つて行くことも考へられる。これは決して、根も葉もない空想ではない。

實際に起り得べきことなのだ。そして、自分のことを考へ、お前達のことを考へると、もう一生會へないかも知れないと思ふのも、無理のないことと言へるであらう。それで、この文章は、書置きのつもりで書くのだ。

(後略)



「娘に送る手紙」7

(八月十五日)

(昭和二十年)

一月許りの手紙も杜絶えてゐたが、今日からまた書きつづけることにする。前のノオトが書き盡されて、あとがなかつたものだから、つい書き繼ぐのが面倒だつたのだ。そしたら、いつの間にか一月経つてゐた。そして、戦争は濟んでゐた。今日は正午に組長の加藤さんの家へ行つて、陛下の御放送を謹聴した。着物も更めて行つて、茶の間の茶餉臺のそばで、奥さんと一緒に聴いた。晝間送電しない地方でも特別に送電して、全國一人残らず聴かせるといふことだつたからお前達も聴いたことと思ふ。

戦争は終つた。そして日本は敗れた。ポツダム宣言、カイロ宣言なるものを聞くにつけ、容易ならぬ事態になつて來たと思ふ。戦争が終つたと知つて、最初はなんだかホツとした氣持だつたが、時が経つにつれ、だんだん心の底が重くなつた。

(中略)

そして朝御飯を食へかけてゐると、早くも關君が見えた。話は戦争の終結したこと許りであつた。關君は最近、戦争の終るらしい情報を何度ももたらしてくれたのだが、一向表面に現れないので、一喜一憂してゐたところだつた。いよいよそれが現實になつたので、話も生き生きと燥いだことだつた。關君が歸ると、僕は部屋を掃いて、拭いた。氣持をさつぱりと改めたかつたのだ。それから、トルストイの「我等如何に生きべきか」といふ文章を讀みはじめた。生きることについて、生き方について、根本から考へたくなつたのだ。



「年少の友」1 (昭和二十年十月二十日完稿)

阿佐ヶ谷へ出て、古本屋を漁つてゐるうちに脚が延びて、高圓寺を廻つて歸つて来ると、「今さうき羽田さんが見えてゐたわ」と留守居の妹が言つた。「羽田さん？」「羽田五郎さん。」「ああ、羽田君か。」「仙臺へ行つてゐて、お寄りしたんだつて。近いうちに第一線へ行くことになつたんださうだわ。」「さうか。」と私は思ひ入れしながら、「第一線はどつたらう。」「臺灣だつて。」「臺灣？ ぢやア、もう會へないかも知れないなア。」「自分でさう言つてゐたわ。だから、一寸の時間しかなかたんだけれどお寄りしたんだつて。兄さんは直ぐ歸るだらうから、上つて待つていらつしやつてはと言つても、もとの下宿へも寄らねばならぬし、時間がないからつて、残念さうに歸つて行つたわ。十分位前のことよ。」

「さうか。そいつは残念だつたなア。」
比島沖海戦は去年のこと、臺灣に艦載機が大挙來襲してゐた頃のことであつた。臺灣へ出撃すると言へば、死地に赴くも同じこと、これが最後になるにちがひないと確信的に思はれた。それだけ、羽田君に會ひそびれたことが、私は残念でならなかつた。阿佐ヶ谷から真つ直ぐ歸つて来ればよかつたのに、古本屋歩きと言へば悪かれたやうになる狂熱が悔まれてならなかつた。「どんな風だらう」「長い劍を吊つて、颯爽としてゐたわ。」「いつ發つんだらう。」「來月の初めだつて。」「多分、もう會へないなア。」
「會へないでせうよ。」

(中略)

それから半年経つて、七月の半ばになつた頃、私達の豫測が適中したと言ふよりも、寧ろ私達の確信が實現せられたかのやうに、羽田君の最後を知らせる手紙が、羽田君の父親である羽田鼎氏から齎されて來た。

※写真は野並秀夫さん(提供・野並浩さん)



※羽田五郎・野並秀夫、羽田鼎・野並臣夫さんがマル

「年少の友」3 (昭和二十年十月二十日完稿)

これで、俺の弟分のやうな男達は、みんな戦争で斃れてしまつた。衛は戦傷死し、崇夫は戦死するし、今また羽田君が殉職するし、みんな、學生時代には、俺を頼りにして縋つてくれたものであつたが……」
「生前面倒見て上げたのが、せめても慰めではないですか。」
「格別面倒を見てやつたわけではないが、この人達が生きてゐてくれたら、俺も將來随分力になつてもらへたんだらうかね。」
「淋しいもんでせう。」

「淋しいなア。」
實際、自分が頼られるだけではなく、自分でも頼りにしてゐた人達だけに、私は自分一人取残され、身邊が頼に寂寥に陥るやうに感じるのであつた。この三人の年少の友は、三人とも、私の村の者で、みんな大學を出てゐて、若くして老い込まうとする私の周囲に、氣鋭の空氣を漂はしてくれ、私の精神に精氣を注入してくれたものであつたが、今やこの若い友人達は次々に私の手からずり落ちて、私は自分自身の青春の精氣が喪はれてゆくやうな淋しさを感じるのだつた。

衛は、私の隣家の一人息子で、中央大學の獨法科を出てゐた。もう二十年近くも前、彼が中學を出て初めて上京して來た朝、私は雪中を東京驛に迎へに行つて、本郷菊坂の下宿に連れて來たことを覚えてゐる。その後私の下宿で、數週間を一緒に過したこともあつた。

一つの蒲團に背中合せに寝て、彼の體温が暖かつたことも覚えてゐる。私が世帯を持つと、彼は日曜によく遊びに來て、半日遊んで行つた。スキーに行つたり、自動車の操縦を練習したりしてゐた。或る年の秋、私が郷里に歸省中、留守宅が泥棒に入られ、荷物の後始末をしてくれたり、警察へ訴へたりしてくれたのも彼であつた。彼は二度目の應召で、中支で戦傷死した。(中略)
後には、年老いた母と、若い未亡人と、出征後産れて、父の顔を知らぬ子供が一人遺されてゐる。

※衛・徳廣(守上林晝生家の隣の家)



※写真は徳廣守さん(提供・徳廣征明さん(守さんの子))



守の妻と母

「年少の友」 4 (昭和二十年十月二十日完稿)

崇夫は、妻の従弟で、私にも遠縁に當つてゐた。彼は、慈惠會醫科大學を出て、海軍軍醫中尉になつて、去年の十月二十五日比島沖海戦で戦死したとの公報のあつたのは、今年の五月のことであつた。彼も、日曜にはよく遊びに来て、夕食過ぎまで話し込んで行つた。私は幾度か、一緒に話し連れて省線阿佐ヶ谷驛まで行き、そこから下宿先の義兄の宅へ歸る彼を見送つたものであつた。彼は、學問に熱心で、學生時代の私などよりは遙かに勉強をしてゐて、學校の研究雜誌に、科學と人間と技術に關する論文を發表したりしてゐた。論文の最後に、参考書目が掲げてあつたのを見ると、それは廣汎なもので、彼の讀書範圍は、専門以外に哲學や文學の方面にまで及んでゐた。彼は、醫學者で文學者を兼ねた人達に興味を持ち、日本では森鷗外を初め斎藤茂吉、木下幸太郎など、西洋ではチエホフ、シニツレル、ハンス・カロツサのなどを好んで漁つてゐた。彼は軍醫學校を出ると、戦闘艦に乗るを潔しとせず、驅逐艦に乗つて、比島沖海戦に行つた。彼も一人息子であつたが、醫者をしてゐる彼の父親は、戦死の報に接すると共に、暫くは氣落ちして往診にも行けなかつたさうである。彼が出征する時、私は彼にケエテの箴言集を持たせてやつた。私は彼が喪はれたと知つた時、自分の身近かな人達の中で、自分及び自分の仕事を理解してくれる唯一の人を喪つたやうな嘆きを感じた。

※崇夫は秋田幹夫

写真は秋田幹夫さん(提供:谷口佳奈子さん)



「上林暁が最後に書きたかつたこと」

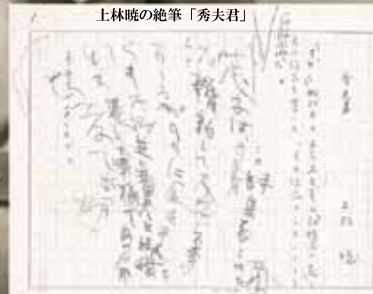
兄は死の四日前まで書きつづけ、十九枚の原稿が残された。それはほとんど、全部、字というより文様とか記号に近い。というより、まだ字を知らない幼児のいたずら書きと言つた方がいいかもしれない。一枚わずかに、三、四個しか字になつてゐない。一面全部字になつてないものもある。それは凄絶とも言える。

一段と衰弱が加つた兄が、息つかいも荒く、不自由な身体を波打たせながら、最後の力をふりしぼり、文字にならない文字を書き綴る姿には、鬼氣せまるやうなものがあつた。

徳広睦子 著『兄の左手』より

睦子は、兄がもはや病床から立ち上がることが難しいと悟つた時、自分の何分の一かの若さで死んでいつた『年少の友』をもう一度掘り起して、それぞれの人生を書きたかつたのではなからうか、と述懐している。その中の一人が、絶筆となつた「秀夫君」である。行年二十五歳。陸軍中尉。(中略)
上林の絶筆となつた『秀夫君』は、私の従兄に当たります。戦局が日増しに熾烈さを極め、敗戦を半年後に控えた昭和二十年二月六日。従兄は陸軍航空隊員として、僚友と共に宮崎飛行場から那覇を経由、台湾へ向う途中で沖縄の海に散りました。野並 浩 著『ふるさとを愛した上林 暁』より

上林暁の絶筆「秀夫君」



※写真は野並秀夫さん(提供:野並浩さん)



今年、上林暁が亡くなって40年の節目の年になり、上林暁顕彰会では、「上林暁没40年記念事業」を計画しています。あいにくの新型コロナウィルス禍の中となりましたが、新しい生活様式を踏まえ、規模を抑えながら実施する予定です。

—上林暁没40年記念事業—

上林暁の句碑が金剛福寺門前に建立される

上林暁にとって唯一の句集『木の葉髪』に収められた「補陀落の 東門とかや 春の寺」の句碑が、足摺岬・金剛福寺の門前に完成しました。小説「岬の僧坊にて」の舞台となっている場所に、上林文学が形になって現れたことは大変嬉しいことです。



足摺岬・金剛福寺門前に建立された上林暁の句碑

没40年記念事業としては、その他町内に三基の文学碑の建設を計画し、「文学の道」創りを一層推進いたします。

—上林暁没40年記念事業・大方高校ソピア塾—

「花の精」High school 文学講座

2019年の大学センター試験に、上林暁の作品「花の精」が採用され注目されたことをきっかけに、地元の学生に上林暁を知ってもらおうと、大方高校と上林暁文学館及び上林暁顕彰会が企画しました。

日時 10月6日(火) ※上林暁生誕118年の日

場所 ふるさと総合センター(大ホール)

対象 大方高校生徒

講師 ※上林暁の曾孫二人

○シェイク・愛仁香(津田塾大学大学院生)

「上林暁と英文学」

○シェイク・ソフィアン(ロックバンド「DOLL」)

「藝術活動とその消費」



シェイク・愛仁香



シェイク・ソフィアン

—上林暁没40年記念事業—

上林暁没40年将棋大会

上林暁は将棋をこよなく愛しました。東京では「阿佐ヶ谷将棋会」を通じて、井伏鱒二や太宰治など、中央線沿線境界線の作家・文人と将棋を通じて交流を深めています。また、郷里に帰ると、地元(下田の口)の将棋好き幼なじみと、一日中将棋を指していました。そんなこともあり、彼の没40年を記念して、四万十市ゆかりの森雞二九段のご協力をいただき記念大会を開催いたします。

日時 11月28日(土)

場所 大方あかつき館

指導 森 雞二(九段)

大会規模

一般30人程度



将棋を指す上林暁

2020年度上林暁文学講座日程
(会場・大方あかつき館)

■10月6日(火) 14:00~16:00

(講師) 松田 大佑(映画監督)

(演題) 「上林暁と映画」

■11月21日(土) 14:00~16:00

(講師) 山本善行(古書善行堂)

■11月29日(日) 10:00~12:00

(講師) 大熊 平城(上林暁の孫)